

## 報告にあたって

2010年10月16日、新設された和光大学E棟の大教室とコンベンションホールを活用して、総合文化研究所公開シンポジウム「子どもを育む『環境』の力」が開催された。

基調講演として、日本の未熟児・新生児医療、乳幼児突然死症候群研究の第一人者である仁志田博司氏を講師に迎え、新生児医療現場からの教訓として仁志田氏が唱える「小さな子どもにあたたかい心を育むことの大切さ」について考えることで、子どものための「環境」の意味を問い直すことをねらいとした。

また、子どもの育ちを支える環境づくりには、「遊び」を活かした支援が効果的であり、親子参加型の遊びのプログラムや遊びの要素を活かした市民活動などが各地域で実施されている。現在、和光大学総合文化研究所においても研究プロジェクト「子どもの育成支援を巡る遊びの環境づくりに関する実証的研究——大学と地域の連携による包括型プログラムの活用を中心として」（研究代表者：小林芳文）が動き出しており、和光大学と地域との連携を活かした既存の実践活動を中心に検証し、それらを活用しながら様々なニーズに対応する包括的なプログラム案を具体的に提示することを目指して活動している。本シンポジウムにおいては、この研究プロジェクトと連携を図り、「遊びの環境」の活用例として、特に「ムーブメント教育・療法」の実践研究を取り扱った。ムーブメント教育・療法による約30年の実践活動に基づく見解から、特に子どもの「発達」を支える遊びの環境づくりについて理解を深めるために、小林芳文現代人間学部教授による講義を設定し、さらに、ムーブメント教育・療法に基づいた「遊びの環境」の活用のための具体的な方法論を参加者に実感してもらうために、ワークショップ形式の第2部を企画した。

シンポジウムは、野中浩一現代人間学部教授によって司会運営され、E棟101教室で第一部の講演を実施し、会場をコンベンションホールに移しワークショッ

ブ形式の第二部に分けて、次のような内容で進められた。

シンポジウム当日は、和光大学関係者のみならず、教育・保育・療育・行政に携わる方々、他大学の大学院生、地域住民の方々など約100名の参加があり、また、静岡県など遠方からの参加者もあり、活気あるシンポジウムとなった。

第一部に参加した伊東達夫学長は、子どもを育む環境について論じられた2つの講義の感想として、「子どもだけを対象にするのではなく、人間とは何か、教育とは何か、政治とは何か、経済とは何か…といった社会全体に関わる根源的な問題を提起された」と述べた。

参加者からは、「講義（理論）とワークショップ（実践）の両方があり、よく理解できた」、「明日からの仕事に活かしたい」、「勉強になりましたが、それ以上に『楽しかった』です」等々の感想をいただいた。特に、子どもに接する仕事に携わる方々からは、講義の内容にあった「あたたかい心」や「ゆっくり、楽しく」という考え方の大切さをあらためて実感したという感想が多く、「もっと知りたい」「次回の案内をお願いします」など続編の開催を期待する声も多く寄せられた。

その後、大学生協食堂で開催された懇談会にもたくさんの方が参加くださり、楽しい雰囲気の中、様々な交流があり実り多い一日となった。ひときわ会場を沸かせた話題は「てっちゃん」の参加であった。和光大学周辺近くに住む本学卒業生の「てっちゃん」は出生時に仁志田氏の医療技術の恩恵を受けていた。今回の企画をチラシで知り、あらためてお礼を伝えたいと母親と共に久しぶりに車椅子に乗って母校を訪れてくれたのである。不思議な縁を皆が感じる中、学生時代と変わらぬてっちゃんの笑顔とそれを見守る母親の優しいまなざしが、懇談会の場をさらに明るくしてくれた。

最後に、本シンポジウムの開催にあたり、お力添えいただいた方々にこの場をお借りしてお礼を申し上げたい。

[小林 芳文（所員/現代人間学部教授）／大橋さつき（所員/現代人間学部准教授）]